



だいきくやこうだゆう
大黒屋光太夫(1751~1828)
 — ロシアを見た漂流民 —

江戸中期の伊勢の船頭。江戸へ航行中、漂流しアリューシャン列島(アムチトカ島)に漂着。その後カムチャツカを経て、ロシアの首都ペテルブルクに至り、1792年ラクスマンに伴われて奇跡的に帰国。彼の見聞をもとに『北槎聞略』が編纂され、日本の洋学の発展に貢献した。



ロシア女帝エカチエリーナ 2世に謁見する大黒屋光太夫 光太夫は、皇帝に直接帰国を嘆願するためロシアの首都ペテルブルクに向かい、そこで女帝エカチエリーナ 2世(1744年)に謁見を許され、フランス風の礼装に身をかため女帝の手に接吻をした。また、博物館・病院などを見学するなどロシアの社会に直接触れることができた。対日貿易の機会をうかがっていた女帝は、漂流民の送還を利用しようとした。1792年第1回遣日使節ラクスマンは、光太夫らを伴って根室に入港した。

当時の日本 (18世紀)

江戸の日本橋付近 18世紀の江戸は、当時のロンドン・パリをしのぐ世界最大の100万人都市であった。「お江戸日本橋七つ(午前4時頃立ち)」と歌われるように、日本橋は五街道の起点であり、江戸に入る物資の集散地としてにぎわった。

『解体新書』(1774年刊) 蘭学は、徳川吉宗の洋書解禁(1720)を機に発達した。西洋医学の解剖書『ターヘル=アナトミア』を杉田玄白らが翻訳した。

